

今でもお母ちゃん、私を小学校時代いじめられとった頃と同じように思うと思う。私、お父ちゃんとお母ちゃんに対して徹底してやさしなかったらあかんと思うねん。お母ちゃん心配なままで死んでしまうんちゃうかなあと思うねん。黙っていつとったらあかんと思う。ホームルームだけやけどやっていっとうねん。」(後略)

生徒たちは、それぞれ質を異にした悩みを抱えて教室に座っています。最初に一步踏み出した生徒に触発されて、彼らはそれぞれの苦しかった過去に正面から向き合っている。辛いこと、苦しいことを過去のこととして闇へ葬ろうとしていたところから、その記憶をもう一度引き戻し、自分の過去と正面から向き合うことを通して、かろうじて彼らは自分の未来へ向かうとするのです。

一九七七年二月二五日発行の「三回生卒業論文集「自分が見えること」(甲第351号証)」は、そうした生徒自身の苦闘とそれを見る市芦高校の教育活動とを、生徒の目を通して点検し表現したものといえます。私の実践報告の文章と生徒によって書かれたこれらの文章は、表裏一体となって市芦高校の教育活動の一部を表現しているといえます。

前記E子の言葉は、本名を名乗ることを逡巡する在日朝鮮人生徒R子に、自分自身と正

面から向き合うことを要求します。奨学生T子の自分の家の貧困をさらけ出して自分自身をクラスの中に据え直そうとする発言も、R子を大きく揺さぶります。生徒たちの間に、緊張感が走ります。このクラスがどういう質で出発するのか、一人一人の真剣な自己紹介によって決まっていくという緊張感でした。生徒たちは、そうした緊張の中で出発し、クラスホームルーム活動やクラブ自主活動、そして学校内外の人間関係の中で鍛えられて、卒業を迎えるのです。

そうした生徒自身の葛藤と成長を証言するものとして、R子の卒業論文(甲第351号証P四六五)の中から一部を抜粋して引用しておきます。

今再び出発点に立つて 一三回生 R子

「私は、本名を名乗って就職して行く。この書かなければ今にも気持ちが悪くずれていきそうな気がする。こんなことを決心したのもついでこの間のことだった。

私は市芦に来て一ヶ月ほどしてから本名を名乗った。入学式の前から先生は家に来て本名を名乗れ、私は「いやだ」の繰り返しで、先生が家に来て本名のことについていうと泣き出すほど朝鮮人であることが恥ずかしかった。何を今さらいうんやろう。日本名のみまでええわ、私は朝鮮人やということ隠してい

ることに對して、窮屈だとも、恥ずかしいことをしているとも思ったことがなかった。だから、先生が家に来ても終始黙っていたし、電話がくれば「いない」と母に断ってもらった。入学式の前だというのが学校に行くのがいやで不安だった。ある時先生が来て何で朝鮮人がいややねんと聞いたことがある。なんと答えていいのかわからず泣き出してしまった。先生が帰ったあと母が「お母ちゃんはやさけないわ、泣いてばかりして、言いたいことがあったら言うたええねん、何がそんなに悲しいねん」と言ったので腹が立って私は「お母ちゃんやねんやないの、私を朝鮮人に生むから」と言ってしまった。その時母は何も言わなかった。私ばかりなんでもんなこと言われなあかんのやろう、本名を名乗ろうが名乗るまいが私の勝手やのになと思っただ。私が泣いたり、わめいたりするので父も『私立にでも行け』と言いだした。私もそうしたかった。でも家にそんなお金があるわけじゃなしと思うとまた父や母に対して腹が立った。貧乏はいややねえなと思った。そして、いやいや市芦に来た。」(中略)

「私が朝鮮人だと気づいたのはいつ頃かわからない。自然にわかったと言った方がいいかもしれない。私の家の近所は朝鮮人ばかりで、誰に教えてもらうことなく自然にわかった。でもその頃は別にそのことが恥ずかし

とも思わなかったけど、やはり貧乏やいうことがいやだった。学校に行くとか何か別の所へ来たみたいで、それにお金がなくて貧しい生活をしているのも私の家の近所だけやわと思いだし、貧乏やいうことを隠そうとした。だから、友達を家に呼んだことは一回もなかった。年をとるにつれて朝鮮人やから貧乏なんやと思いだした。家が汚くそして貧乏していることは、恥ずかしかったけど、家に帰るとそうでもなかった。毎日学校から帰ると、父も母も仕事にいらっているから、みんなで集まって遊んで夕方母が帰ってくるのを待った。夜になるとあちからもこちからも大きな声が聞こえてくる。夫婦喧嘩をしている。今日はなんともなかったも明日のことはわからない。近所が全部こんなだから変な連帯感みたいなものを感じ、さほど恥ずかしいとは思わなかった。学校では恥ずかしいと思っていたことがうそみたいになってくる。朝鮮のこととは何もわかってなかったけど、みんな汚い家に住んでるし、お父さんはお酒のみで貧乏やという先入観みたいなものを持っていた。だから、本名を名乗って朝鮮人だと人前に出ることがいやだった。」(中略)

「市芦に来てからは毎日先生と呼ばれて、本名のことについて話をした。いやで逃げて帰ったこともよくあった。しまいには『もうどうでもええわ』と思いだし、『本名名乗っ

てはしなかったら名乗ってやるわ』そんな気持ちになった。自己紹介が始まった。『私のお母さん病院で血洗っているけどみんな友達になっはしい』『私、進学保障で入ってきたからがんばらなあかんと思ってる』『私はまだ迷っている。』『名乗ろう、それとも』と思うままに名乗ってしまった。半ばやけっぱちのような気持ちだった。理由もなく涙が出てきた。『これですつとしたような、これからはどうなるんやろう』こんな気持ちで交錯していた。これで友達もなくなってしまうし、朝文研だけやと思った。別にクラスの様子は変わらなかつた。うれしかった。なんか『ほっ』とした。肩の荷がおりたようで、大きな顔をして朝文研に行けた。」(中略)

「私が市芦に来て本名を名乗ったことに對して、よかったとも悪かったとも思っていない。ただ『ほっ』としたという気持ちだけだ。先のことなど考える余裕もない。毎日が必死であった。だけど名乗らなあかんと言いたい。みんなは『朝鮮人の自覚がついてからでも、遅くない』と言うかもしれないけど、何もしないで自覚なんてものはいままでたつてもつけられるものじゃないと思う。私も最初は自覚がついてからだの、もっと朝鮮人のことを勉強してからだのと逃げ道ばかり探していた。本名を名乗って色々なことに接して初めて自覚が出てくると思う。私は朝文研もそ

こそこにしてきたけど、やはり朝文研がなかったら今の私はいてないと思っている。朝文研を通して腰を据えて父や母を見ると、初めて今までの自分の愚かさ気づいた。なんで父が酒を飲み、母までが働かなければならなかったのか、なんで貧乏せなあかんのか。父や母がさぼってきたわけでない。時には酒を飲み暴力をふるったかもしれないけど、そうせざるを得なかった理由がある。朝鮮人だというだけで人間扱いされず、働いても働いても生活は楽にならない。そんな気持ちを酒にたくしたのだ。酒はすべてを忘れさせてくれたのかもしれない。飲んでいるときだけとわかっていてもやはり飲まずにいられない。私だって小さいときは、『ああ！貧乏はいややなあ死んだ方がましや』と思っただけだ。私は何もせずに母が作ってくれるご飯を食べ、ちゃんと学校に行かしてもらっているのにこんなことを思っていたのだから、父や母が思うのは仕方がないと思う。

何を書いてきたのかわからないけど、とにかく私は本名を名乗って就職していく、もうそう決めてしまった。これしか言えない。今にも誰かに何かを言われれば崩れてしまいそうな気持ちだ。でも何かがそうしてはいけな

て行くことしかないと。私が朝鮮人として生きていくこと、先のことなど全然わからないけど、ただ『やっていかなあかん』と思う。何も考えないで『ぼけっ』としていたいけど、そうもしてられない。毎日、毎日が自分との闘いだと思っている。この論文を通して何も言えないし、読んでくれてもなんの役に立たないかもしれないけど、私が本名を名乗っていくことは、今までの自分のやってきた積み重ねを無駄にしないから。朝文研に行きながら迷った。こんなことして何になるんだろう、もっと他にやらないあかんことがあるん違うかと思っただけ、これが私の一番やらなあかんことや今は思っている。私が市芦で学んだことは、朝鮮人として生きていくということ、そしてそれが本名を名乗って社会に出ていくこと、今再び出発点に戻ったということだ。」

様々な立場におかれた生徒たちが、自分の生活を背負ったまま身をさらしてクラスに座ることによって、お互いが触れ合いあひあひの質は形成されていきます。そして、クラスの質は、生徒の重要な学習条件の一つとなります。良質なクラス形成によって生徒の学習意欲もまた高められていくことになります。また、R子の卒業論文は市芦高校のホームルーム活動、朝鮮文化研究部活動にとどまら

ず、就職活動についても触れています。これらの諸活動は、R子にとっては一体のものとしてあり、生徒の成長の糧となっています。自分の背負った環境を精一杯生きようとする生徒一人ひとりの存在が、同じクラスの他の生徒たちにも長い時間をかけて少しずつ影響を与えていきます。(中略)

一三回生の生徒の文章を通して市芦高校の教育と私の教育活動に触れてきました。『この闘いに映し出されて』(甲第6号証)には、『強制配転阻止闘争と生徒の闘いを接続するもの』と題して、一六回生と私の三年間の教育活動が記録されています。(上記P四二、五七)

一六回生は、私が初めて「知恵遅れ」といわれていた三名の「障害生」を担当した学年でした。「障害生」が普通高校の普通学級に在籍したとき、彼らはまず「周囲からの無視」に出会います。クラスの生徒には異質なものの、自分たちとは縁のないものとして見られるからです。さらに学校生活を重ねていくと、こんどは「いじめ、からかい」に出会うようになります。日常的な彼らの存在が、「無視」できなくなってくるからです。これもどうしても避けがたい「障害生」と他の生徒の関係の作り方、出会い方の一つなのです。そこをくぐり抜けてようやく「障害生」とクラスの

生徒との「共生」へと至るのです。「共生」という理想には届かなくとも、少なくとも教室にみんなと一緒に「障害生」がいることが普通になつてくればそれでよいのです。毎日、学校の中で「障害生」と他の生徒と一緒に生活し続けることで、確実に他の生徒の中にも遺産は残るのです。そのことは、この三名の「障害生」のことも含めて『時を刻む』(甲第224号証P二四、二五、P七六、八四)に述べられているところです。

さらに、『ひびきあふこと』(甲第8号証)は、私が担任をはずれて奨学金係として連れ添った一九回生の奨学生たちを中心とする自主活動の記録です。特に、奨学生の活動は学年を越えて連携し、相互に学びあう関係が成立していましたから、市芦高校の生徒たちの良質な自主活動が先輩から後輩へ受け継がれる貴重な機会でもありました。それは、そこに収録されている他学年の生徒の文章によっても分かります。また、石橋陳述書のP一九、二〇に引用されている二〇回生の文章は、担任の取り組みを前提として、一九回生の奨学生たちの自主活動によって生み出された文化祭での劇「いも虫の唄」が、後輩たちを如何に励まし、大切な遺産を後輩たちに手渡していたかを物語っています。

奨学生活動は、奨学生活動にとどまらず、

クラスへ、後輩へ、学年へと良質な影響をもたらしたのです。奨学生活動に限らず、市芦高校におけるさまざまな教育活動は、それぞれの取り組みとして存在しながら、他の取り組みと切れては存在せず、それらと響きあってその質の深さと広がりを持ち得たのです。

② 私の進路指導担当者としての とりくみ

私は、進路指導部担当として、『時を刻む』(甲第224号証)に記録されている学校挙げての進路保障の取り組み(上記P五六、七五)に積極的に参画してきました。進路保障の取り組みの内容については上記文書に詳しく説明されており、既にこれまでに引用した生徒の文章の中にも表れているとおりです。

ここでは、私が担任した一六回生の卒業論文の文章の一つ取り上げて若干の補足としておきます。この文章は第一七回生『卒業文集』(甲第352号証)に合併されて掲載されている一六回生の論文「お母さんが大きく見えた」(上記P六三、六七)からの引用です。生徒がどのような質で自分の進路を決めていったのか、これが、市芦高校の全ての教育活動の延長線上にあって、それらを総括するものとして存在した進路保障運動の、大切な遺産だったのです。

お母さんが大きく見えた 一六回生 M子

「私が進路のことを考えるようになったのは最近で、奨学生集会に出て家のことが見えてきたからです。はじめは、家のことはHRでしゃべったりしていても実際は、わかっていなかった。母親のことも全然わかっていなくて、働いている姿なんか見ようとせず、むしろ、母親のこと知ったかぶりをして、その裏では母親の悪いところしか見ようとしなかった。それが奨学生集会に出て、人の話を聞いて自分を点検していくうちに、自分の甘かったところが現れてきた。奨学生集会の中の話は、すごく、聞いててしんどくなってきた話ばかりだけど、自分の中にはいっていか話でもあった。」(中略)

「お母さんが今の仕事につく前はパートで働いていた。くらげやもずくなんかの袋詰めで、私も小学校六年の時そこでアルバイトしたことがあるからしんどいのはよくわかった。私は手が冷たくなってかじかんで痛くなるとほうりなげてしまった。そんな見ながらも、お母さんは黙々と袋詰めをしていた。」(中略)

「その時、私は小学校で貧しいということ、あまり友だちもおらんかったし、家にも誰もいなかった。狭い、汚い家だったから、すぐはあかしかってようばんかった。友だちのお母さんに『あんな子と遊んだらあき

ません』ってものにいわれたこともある。くやしかった。その頃から学校へ行くのがいやになって、仮病でよくさぼった。勉強をさぼるからだんだん分らんようになった。そうなるよけいに学校いかんようになった」(中略)

「私が、そんなことしてる時、お父さんが結核になって入院して、その給料が少ないうちは、今の病院の仕事をつけてきた。今の仕事は病院の食器洗いで、病院中の食器を洗う仕事をしている。ただ食器を洗うだけならともかく、各階の食器をワゴンにのせて洗う場まで運ばないといけない、そのワゴンがすごく重くて、そのため、お母さん腕や腰を痛めて、いつも朝起きるときに必ず「腰痛い」って二、三回言ってから起きあがる。ひどいときには、目がさめてても、起きあがることのできなくて、しばらく横たわっている。そんな時は、私がお弁当を作る。そんなお母さんみて、今までは、母親の仕事何もせんと子どもにやらせて自分だけ寝てと、よくかんしゃくをおこした。今では、お母さんより先に起きたら自分で作るようにしているし、お母さん一生懸命働いている姿が見えてきたから、お母さんに対して今までのように何も無いのかんしゃくおこしたり、家事をするのがいやだからといって文句をいうのをやめてるつもりだ。お母さんは今の仕事で十分、

体を痛めている。それでも、働かな食べていかれへんから、体こわしても今の仕事をつづけている。そんな姿を見るようになったのは、奨学生集会で自分が自分をそんなふうにしたと思う。」(中略)

「(お父さんは)退院してからも一年ぐらいつと家にお父さん、収入はやっぱりお母さんだけだった。その時のお父さんは一週間に二日ぐらい病院に通って、他の日は家で寝たりしてた。そんなお父さんの姿みて、お父さんずっと家にいてすごうれしかったけど、その反面、何も働かんとずっと家にいて、他の家のお父さんは一生懸命働いてんの、私のお父さんだけ働かんと、病氣やからとは思ってても、どこか恥づかしいと思った。」(中略)

「あのとき、病氣になってなかったら、ずっと一つの所におさまって、今ごろ棟梁にでもなってるんがうかと、お母さんがよくいつている。私も思った。お父さんが病氣しなれば今みたいにお金のことしんどい思いしなくてすんだんとちがうかと、よく思った。でも病氣になったんは、体が悪くなりかけたとき無理して働いたからだし、お父さん責めることじゃないと思うようになった。お父さんもまあ、弱いからだにむち打って精いっぱい働いてる。そんなお父さんやお母さんの上に私らがいる。今までは、平氣でお母さんと

生徒たちは、進路を考える中で「生きる」ということを考え始めているのです。

(2) 理科教育における実践

理科の教育研究は、既に石橋陳述書でも触れられているとおり、大変な努力を必要としました。私が採用された当時は、生徒の意識の中に「勉強は大学受験のため」との意識が色濃く残っており、就職する生徒はもちろん、大学受験する生徒は大半が文化系の大学をめざしていたため、理科の授業などは生徒にとって学習対象とはなっていないでしだ。従って、当時の理科の授業は、非常にやりにくい状況にありました。その一方で、大学受験とは無関係に、低学力に悩み、学習意欲まで奪われた生徒が授業に無関心なままに教室に座っているという状況もありました。

私は、市芦高校で授業を始めてまもなくそのことに気づき、できるだけ教科書を丁寧に教えることでそれを克服しようと思いました。「教育改革」後から現在まで、市教委が推進している教授方法です。ところが、そうした方法では、全く成果が得られませんでした。今まで私が受けてきた受験勉強の焼き直しでは、それを如何に丁寧に繰り返そうが、生徒の学習意欲や学力を引き出すことはできない

お父さんのことをしゃべってた。すごく、お父さんやお母さんに恥づかしく思う。私はこんな両親の生活みて、進路を就職に決めた。」(中略)

「就職する上で私は、お母さんのことをもう一度考えた。それは、お母さんの今の職場でのストライキをおこしたことです。今まで病院全部の食器洗いをたった三人でやってた。それで、やっと休みが取れていた程度で、一人が倒れたらぶっ続けで出なかんかった。そこへ、機械を洗い場に入れて、仕事が減るどころか、手間がふえて、三人がつづけて出なくちゃいけなくて、休むことができなかった。そのことで社長さんと話し合いをもっても、社長さんが逃げて話がかず、とうとうストライキをおこした。その時社長さんは冗談としてお母さんに「バカ」と言ったのに対して、うちのお母さんは「バカです。私はバカやからこんな所にしか働かれへんねん」と社長に言い返したと聞いたとき、私は何か、お母さんやお父さんが勉強できひんことを、中学や小学校しか出ていないことを今までかんとに考えてきたと思った。お母さんやお父さんが勉強できひんかったことが今の生活に大きく関わっているように思えた。だから勉強しなあかんという話ではなくて、勉強できなかつたら生活にまでかわわってくることを、お母さんが身をもって見せてくれたし、

ことを思い知らされました。そのとき、中学校の授業の焼き直しではない、また自分が受けてきた受験教育の焼き直しではない「分かる授業」「楽しい授業」の創造が求められていたのです。

そこで、理科教育関係の書物を読み漁りました。そして、民間教育運動からも学び、実験をふんだんに取り入れました。学年挙げてのホームルームづくりの助けも借りながら、生徒がのびのびと楽しく学習できる授業づくりに取り組み始めました。そのことが、当時の兵庫県高等学校教職員組合(以下「兵高教組」という)の教育研究集会(以下、「教研」という)の報告(甲第353号証)としてまとめられています。この実践報告は、校内の理科教科会議での勧めもあって、市芦高校分會、西阪神支部の推薦を受けて兵高教組本部教研で報告されたものです。

市芦高校へ「低学力」で入学してくる生徒たちは、たいてい小中学校時代に家で宿題をするような学習環境を持たず、教えてくれる人もおらず、そのため学校での勉強が分からなくなり、そのまま放置されてきているという現実がありました。そのことは、先述の生徒の文章にも語られているし、教研報告の中に記載されている入学当初に行った生徒の学力調査にもよく表れています。被差別部落出身者、在日朝鮮人、貧困であることによる差

社長にひらきなおって「私はバカです」といったお母さんがすごく大きく見えた。家では勉強のことになると私の方が知っているけども、そういう社会での知識は私よりはるかに多くもっている、そんな、自分をひらきなおらせていくお母さんの生き方を私が出来るかという不安が新たに生じた。」(中略)

「口こそ出さないけれど、『私はバカです』の言葉の中に、お母さんの生き方を学んだように思います。中学校もろくにいかなかったお母さんが、勉強では私より劣るけど、社会に出た人としては私よりもはるかにすぐれている。

今まで自分の生活が苦しいとは思ってなく、こんなお母さんのひらきなおった生き方の中には、しんどい生活をおくるのも一つの道だということを学んだように思う。私もまたこんなしんどいことをやってみていくなかで、今の考えに至ったと思う。しんどいのをさけても、前は見えない。しんどいのを乗り越えてこそ前が見えてくると、身をもってお母さんが教えてくれたと思う。今のしんどさをのりこえて、私もお母さんのような生き方が出来たらと思う。また、出来る自信もつきたいし、その自信をつけることが私の進路の決め方だと思うからだ。お母さんの教えてくれたことを大切にして、これからの進路を決めたいと思う。」

別が生徒に大きくのしかかり、生徒の学力破壊を生み出していることはこれまでに引用した生徒の文章からも読みとれ、また、上記教研報告P六の調査結果からも明確です。これらの生徒を含む全ての生徒の学力保障に取り組む授業が模索されねばなりません。

市芦高校の生徒たちを退学させることなく学校へつなぎとめることが出来る授業は、楽しくて、やさしい、本質的な授業だけです。そのような授業を作り出すことは大変難しいことですが、やりがいのある仕事でした。めざす授業が成立したとき、そこでは授業の障害となっていた生徒たちの学力差は目立たなくなり、生徒たちの発言も行動も活発になってきました。

こうした内容の教研報告を、「このレポートの中で、こんなすばらしい教材で、こんなすばらしい授業をやっているんや」などという報告をするつもりは毛頭ない。ただ、私たち市立芦屋高校の教師が、何を気にしながら、何を点検軸に定めて授業の検討をやってきたか、そして、その中で生徒たちがどのような姿でたちあらわれてきているのか、という報告にとどまる。」と書き添えて、兵高教組の推薦を受けて日本教職員組合の全国教研へ提出しました。全国教研には、全国各地の理科教育研究サークルのすぐれた実践家が数多く集まります。その中で、この市芦高校の理科

社長にひらきなおって「私はバカです」といったお母さんがすごく大きく見えた。家では勉強のことになると私の方が知っているけども、そういう社会での知識は私よりはるかに多くもっている、そんな、自分をひらきなおらせていくお母さんの生き方を私が出来るかという不安が新たに生じた。」(中略)

「口こそ出さないけれど、『私はバカです』の言葉の中に、お母さんの生き方を学んだように思います。中学校もろくにいかなかったお母さんが、勉強では私より劣るけど、社会に出た人としては私よりもはるかにすぐれている。

今まで自分の生活が苦しいとは思ってなく、こんなお母さんのひらきなおった生き方の中には、しんどい生活をおくるのも一つの道だということを学んだように思う。私もまたこんなしんどいことをやってみていくなかで、今の考えに至ったと思う。しんどいのをさけても、前は見えない。しんどいのを乗り越えてこそ前が見えてくると、身をもってお母さんが教えてくれたと思う。今のしんどさをのりこえて、私もお母さんのような生き方が出来たらと思う。また、出来る自信もつきたいし、その自信をつけることが私の進路の決め方だと思うからだ。お母さんの教えてくれたことを大切にして、これからの進路を決めたいと思う。」

の報告は、学校挙げての真摯な取り組みとして高い評価を受け、理科教育分科会の全体集会（五〇〇名余の参加）での四本の報告の一つに選ばれました。そのことは、理科教育研究の全国誌である『理科教室』一九七五年二月号（甲第361号証）にも掲載されています。

これは、市芦高校において、学年と教科が協力して生徒の学力保障に取り組んできたそのささやかな一成果に対する全国レベルでの評価であったといえます。

私は、特に宮城教育大学教授の故高橋金三郎先生から多くを学びました。高橋先生がなくなられたときの追悼文として書いた文章（甲第354号証）の中にも、私の理科の教育観、理科教育の取り組みが一部記載されています。

このようにしてつくられた教材は、それがやさしくて本質的であれば小学生から大学生にまで通用します。実際に、市民センターでの市民講座を個人として依頼されたとき使用した教材は、市芦高校で私が使用していたものでしたが、戦争中ではほとんど勉強できなかったという高齢者の方にも、高校や大学を卒業した市民にも十分通用するものでした。

処分当時の松本教育長は、市芦高校の教育の実態を十分調査もせず、またその値打ちもわからないまま、「市芦高校の教育はプリン

トばかり使って教科書も使用せず程度が低い」という主旨の発言で市芦高校の教育を馬鹿にしていました。（甲第100号証）そのため、「教育改革」以後、校長を通して職務命令によって自主教材の使用禁止を求めたのですが、それこそ市芦高校の教育に対して無知と偏見で対処したものといわざるを得ません。そのような「教育改革」ですから、それは必然的に教育破壊をまねいたといえます。

(3) まとめとして、生徒の自立を促す教育を恐れ、破壊した市教委

担任、ホームルーム活動、生徒の自主活動（部落研活動、朝文研活動、障害研活動、奨学生活動、生徒会活動）、進路保障の取り組みは、全て有機的に結合して、生徒たちを大きく成長させていきました。そして、それに教員として立ち会うことは私にとってやりがいのある仕事でした。また、それが出来る立場にあるからこそ教員といえるのです。

こうした、生徒をとりまく有機的な結合が市芦高校の風土を形成し、その中で生徒たちの教科の学習活動も行われていました。

従って、一人の教員の実践、一人の生徒の成長は、それが独立した別個のものとして存在したのではなく、全ての生徒、教員によって形成された風土の中で初めて成立し得たものでした。

ところが、こうした特徴ある学校として発展してきた市芦高校の教育を嫌い、生徒管理と受験教育を前面に押し出して「教育改革」は、進められたのです。

私が担任した一三回生、一六回生については、その一部を先述しました。二二回生については、私が担任した二人の生徒の言葉が鈴木陳述書のP四〇五とP二二二に引用されています。そのうちの一人は部落問題研究部の部長でしたが、入学当初は他人に対してほとんど言葉を発することのなかった生徒であり、もう一人の「二二回生からの訴え」（甲第9号証の2）を書いた生徒は、それまでにはほとんど文章を書いたこともなく、卒業まぎわになって初めて英語のノートを全部使いきって「俺、一冊のノートを最後まで全部で字で埋めたんは生まれて初めてや」といって喜んでいた生徒でした。彼らの言葉を通して、市芦高校の教育が生徒たちにとってどのようなものであったのかが表現されています。彼らの発言や文章の中で、「教育改革」は手厳しく批判されています。生徒たちは、前田校長や松本教育長の教育観など足元に及ばないほど、質の高い豊かな教育観を獲得しています。

また、従来からいっこうに解消されない市教委の市芦高校への無知と無理解について、

一六回生K夫は怒りをもって次のように語っています。

「俺ははっきりいうと、高校の時悪ガキ大將みたいな生徒やった。そやけどだんだんと日々がたつにつれていろんな事が考えられるようになっていった。でも俺一人やったら考えられへんかったやろ。何でかいというたら理由ははっきりしてることやけど、悪ガキのままやったら学校から離れていつて今の俺はいなかったからや。そんな俺を少しでも人間らしい人間にしてくれたのが市芦の先生たちや。た。いくら悪い事してもみすてんと話をちゃんとしてくれた。（中略）世間は何ともいえないわさが飛び回って悪いようにいつてるけど、市芦の良さいうもんはそう簡単にわからへん。いやわかってたまるか。俺らも三年間おってやとわかったんや。何が良かったんや。やいうのは教育委員会の人には必要はない。そやけど卒業生がこんな文をわざわざ学校まで書いて書くという事だけはわかってくれ。いやお前らは芦屋市の教師の頭やねんからわかるのがあたりまえやないか。」（甲第6号証P四三）

K夫は、「俺みたいな生徒でも親のこと考えられるようになったんや」（甲第351号証P六七〇）という卒業論文を書いた生

徒です。生徒たちは市芦高校の中で、自立し、自分の目で確かめ、考え、ものをいうように成長しました。そして、時として自立した生徒の批判が学校や教員に向くこともあり。私たちはそれを「生徒の自立」と考え、喜びとします。ところが市教委は、そうした生徒の批判力を身につけた自立と成長を嫌い、恐れるのです。私たちは、生徒が自立し、生きる力をつけていくことを援助することが教員の仕事だと自覚しています。そこに市教委の考え方と決定的な違いがあります。

最後に、私は担任をしましたが、奨学金係として三年間をつきあった生徒K子が、卒業生の代表として在校生に贈る「卒業生の言葉」として読み上げた「答辞」（甲第356号証）の一部を引用します。

卒業生の言葉 第一九回卒業生代表 K子

「私は市芦に入学するまで、市芦についていろんなうわさに迷って、自分で勝手に市芦という学校を形づくり、不安をもったまま入学してきました。中学三年で進路をきめるとき、どこにいくか迷っていると担任の先生に市芦に行くことをすすめられました。「市芦はアホの行く学校や」「市芦なんか行ったらマトモに勉強できへん」などと聞いていたので「市芦なんか行きたくない」と思っていました。家には私立に行けるようなお金もな

く、あまり勉強もできなかったから県立や県南も無理でした。（中略）
こんな私も、市芦で三年間過ごすあいだに少しずつ変わっていききました。みんなが三年間の思い出を卒業論文に書いています。いろいろな行事を通しての思い出もあります。そして私にとって三年間、最も大切に、一番大きな影響を受けたのが奨学金でした。（中略）

市芦に入学し、しばらくしてホームルームで自己紹介をしました。みんな家のことや自分のことを話していききました。他の子が「奨学金のことを言う？」などと言いついてくるのをそばで聞いて、そんなこと言ってもあれみかうだけだと思っていました。それでもクラスの自分に同じように奨学金とっている子がいることは、自分一人で隠れて奨学金もらうこともないだろうと思えば楽でした。

それから私は奨学生集会と出会いました。はじめは何をするのかもわからず、いかなあかんやろうという気持ちとクラスの子ども行くからと言う気持ちで集会に行きました。そしてワケのわからないまま「集会に出て頑張りたい」と言っていました。（中略）

何度か集会に出て、先輩の話や他の子の話を聞いている中で、それぞれがいろんな生活の中で奨学金をとっていることがわかるよう

なっていました。奨学金っていったらお金もらっているだけじゃないんだと思いはじめてきました。(中略)

集会の中には自分と同じような話に出会うこともありました。そして話を聞きながら自分も奨学金とって恥ずかしい思いをしてきたことから目をそらしてはいけないと思いました。そうしなければ自分もまた、奨学生の話と同情心でうわべだけで聞いてしまうことになると思います。(中略)

三年での奨学金闘争で最も自分をみつめ直すことができたと思います。奨学金申請した中から五人の子が収入基準オーバーで落とされました。それは選考委員会が私の書いた申請文を、きちんと読んでないということでした。

私にとって奨学金は自分の生活を見つめ直していくものであったのにそれを数字だけで切り捨てるなんて許せないことでした。申請文は奨学金を申請したそれぞれの子がいろいろな問題にぶつかりながらも自分の生活をさだけだして一生懸命書いたものでした。このまま認めてしまつては私の生活や気持ちは無視されたままになってしまふと思いました。しかし収入基準だけで押し切られて、「何話しても通じへん」というもどかしさに私はちがいはありました。落とされた子は奨学金申請に自分の再出発をかけていただけに、そ

後輩のみなさんは、これから進路のことなどでも悩んだり迷ったりすることもあると思います。でもどんなときにも自分をしっかり見つめ、そしてホームルームの中で、みんなで支えあい、それぞれが精一杯の力を出せるように頑張つてほしいと思います。

見事なまでの生徒の自立と、先輩から後輩への最良の置きみやげです。市教委は、こうした生徒の自立を恐れ、それを生み出す市芦高校の風土を嫌い、「教育改革」の名のもとにすべてを破壊してしまいました。

市教委は事あるごとに「特色のある学校づくり」「自ら学ぶ教育」などっていますが、市教委こそが最も「自ら学び自立していく生徒」を恐れて、市芦高校の特徴ある風土を嫌っていたのです。

市教委のいう「教育改革」は、「生徒の進路保障」、「生徒の自立」を目標とした教育の破壊以外のなにものでもなかったといえます。

また、「市芦高校は勉強のできない生徒ばかりに力を注いで、他の生徒は放置していた」との偏見に対して、一言つけ加えてこの項を終えます。

先述してきたように、生徒が自立し、緊張感をもって成長していく風土をもつ学校の中

れをつぶされて自分の生き方が見えなくなり疲れていくのがわかりました。その姿を見ていると私達まで疲れてきそうになり、私自身も投げやりな気持ちになっていました。でも負けたら「お金だけの奨学金になってしまう」と思い、自分自身を総括することで闘いをつづけていくことだと思いました。奨学生通信を何度か書く中で、集会在自分のものになってきて、自分のやるべきことがわかってくるようになりました。(中略)

三年の文化祭では奨学金闘争の続きとして奨学生の劇「いも虫の唄」を演じました。「劇しても同情されるだけや」「みんなマトモに見てくれへん」という気持ちが克服できず、練習も何度か中断し話し合いを持たなければならませんでした。

毎年、文化祭では朝文研や部落研が劇をしています。自分を「部落民や」と言い「朝鮮人や」と名乗る。それは私達にわかってもらおうという前に自分自身が部落民として朝鮮人として生きて行くんだという自覚を持っていくことだと思えます。そのしんどさがどんなものか私達にはわかりきれないと思います。でも私達がそれをわかっていくためにも、自分自身を問い直す劇から逃げてはいけな

三年期になり市教委主催の青年の主張大会に再び「いも虫の唄」を演じました。その劇

では、生徒たちは各自のペースで高校生活を全うして卒業し、進学へ、就職へ、それぞれの進路を選択していったことは言うまでもありません。そのことは、『時を刻む』の「進路保障の取り組み」(甲第224号証P五六)及び「過去の入学、卒業、進学状況」(甲第114号証)の卒業生数の推移から明白です。「教育改革」によって、かえって多くの悪影響が出ていることが確認できます。

教員が自らの教育論や意見をもって自立し、生徒と深く関わり、生徒の自立と学習を促す教育を、市教委は最も恐れたのです。教員と生徒の自立を恐れた市教委は、「教育改革」の名のもとに、こうした市芦高校の教育を破壊したのです。

そして、一九八七年度、市芦高校の中に生き残って、これまでの教育を守ろうとして、「教育改革」を批判し続けた私は、翌一九八八年度に強制配転によって市芦高校から排除され、教育権を奪われました。

2 組合活動の阻害

政治的「教育改革」によって、教育条件が大幅に悪化し、教育破壊が行われましたが、それに反対し続けた組合も同時に弾圧され、組合活動が大きく阻害されました。ここでは、処分者による組合攻撃と、それによる組合活動の阻害について述べます。

まず第一に、一九八六年九月以降の組合活動の制限と、組合委員長と書記長の停職処分及び停職処分と軌を一にした組合創設時からの活動家鈴木木の強制配転処分が挙げられます。この不当性については既にそれぞれの事案において陳述されているところです。また、前記処分前後の組合活動の制限についても、滝山陳述書(一)で既に述べられているとおりです。

次に、これらの組合に対する攻撃に引き続く形で起こったのが、一九八七年度人事異動における組合員六名の強制配転でした。配転された六名のうち、滝山、小川、森村は、既に一九八七年度組合執行委員に選出され、公平委員会にも届け済みの状態にありました(甲第294号証)。組合執行委員は、当時五名で構成されており、そのうちの三名の執行委員が強制配転されることになり、予定されていた組合の執行体制は破壊され、執行委員の選出のやり直しを余儀なくされました。

また、強制配転された鈴木木、滝山、小川、森村、吉岡、麻田、石橋については、組合総会において特別に組合員資格を承認しなければ組合員としてとどまれない状況になりました。その後、私たちの上部団体である兵庫高等学校教職員組合の規約にも同様の組合員資

支援の呼びかけで、最後のホームルームで奨学金とってきたことをクラスにはじめて言いました。今まで「聞いていない」「わかってくれない」と言っていたけれど、それよりも自分が奨学生としてこのクラスにいることをたしかめていくことが大切だと思いました。

劇を通して、今まで集会にもほとんど来なかった子がクラスの中で家の話をし、前には「家の話なんかしない」と言っていた子が劇を見て親の姿と考えあわせていく中で卒業論文に親のことや家のことを丁寧に書いてきました。私達は、最後のホームルームになって、やっと奨学生としてクラスで動き始めることができたように思います。

そして入学当時は市芦生であることが恥ずかしかつた私が今では市芦生であることが、自信につながってきました。三年間かかって私は自分が大切にしていくなすべきものを知り、それを見失わずに生きていくためには、自分の汚い部分や弱い部分をさらけ出していくことからはじめなければならぬことを知りました。(中略)

私は市芦でいろんなことを考え学んできました。私達の誰かが追いつめられたとき、持ちこたえええあつていくために、そして自分にとって大切なものを見直していくために、ホームルームや奨学生集会があるのだと思

えを

えを

格承認条項を加えてもらい、同組合本部の組合大会において組合員資格の承認を得て、現在組合員資格を保持しています。そうした意味で、現在も私を含む申立人ら九名は強制配転により組合員としても不安定な身分状況に置かれています。

さらに、甲第339号証の1に見られるごとく、一九七九年度以降は、欠員不補充によって市芦高校の教員削減は進行しており、この点だけからすればわざわざ条例改正までして一挙に大量の教員削減を行い、教育の混乱をまねく必要は全くなかったのです。

また、六名中三名もの教員の強制配転によって過度に教員が減った社会科、教員が不足状態にあるにもかかわらず強制配転を行った英語科。これらは、組合活動の中心を担ってきた人物として既に強制配転を受けていた社会科の鈴木に加え、一九八七年度執行委員に選出されていた滝山、小川、森村をねらい打ちにしたために生じた教科の教員のアンバランスであるとしかしいようがありません。

また、一九八六年度の当初には、前年度の一時金供託問題の解決、そして教育問題に関する窓口の設定など、組合と教育委員会の関係改善が進んでいたのですが、同年七月に松本教育長が就任して以来、一挙に敵対関係に

持ち込まれていきました。

すでに、鈴木陳述で述べられているとおり、松本教育長は、はじめから日教組との対決、組合つぶしを目的としていたのです。本件を含む強制配転は、全てそのシナリオの中に描かれた組合つぶしのための一手段だったという事が明らかです。特に、市教委は一九八七年六月付文書で「昨年来、教育の改革を是非実行しなければならぬと考え、まず市の最上級校である市立芦屋高校から改善をして参りました」（甲第101号証）と、小中学校のこれまでの教育をつぶすために、まず頭の市芦高校の教育をつぶしたと明言しています。芦屋市でこれまでに組み込まれた教育運動をつぶすために、まず市芦高校の教育運動をつぶす。そのために、市芦高校の組合を弱体化させることが第一の目標とされたのです。当時の芦屋市の四つの単組のうち芦屋市職員労働組合（以下、「市職労」という）など他の三単組と差別して、市芦高校の組合だけに組合年休の付与と組合事務所の供与を拒み、小中学校では認められていた職員室への組合掲示板の設置やこれまで便宜供与されていた学校施設、設備、機器の使用も拒否するなど、あらゆる方法で市芦高校の組合活動の妨害工作が市教委により実行されました。

さらに、一九八七年度の賃金、一時金交渉では、市教委は交渉めきで、市職労などとの

交渉の妥結内容を一方的に通告し、押しつけてきました。（甲第222の1号証）それに対する抗議や交渉要求（甲第222号証の2）も一切無視されました。市教委の市芦高校の組合への徹底した差別でした。

すでに陳述されている組合員への不当な停職処分、配転処分、訓告処分は、他の組合員あるいは新採用の教員を恫喝し、組合から遠ざける機能を果たしました。また、現在、組合員一五名中九名が市芦高校から長期間にわたって排除されているという現状は、通常の組合活動を阻害し、また組合の拡大を阻害しています。教職員組合は、生徒の教育活動とともにするところから団結と運動を作り出してきたのです。このように、勤務場所も、勤務時間も、仕事内容も分断された状況で、組合活動が阻害されるのは必然といえます。組合ニュースの発行が極端に減少したのも一九八八年度からであり、それは、前述のような状況で組合活動が停滞せざるを得なくなったことを反映しています。

私の強制配転と他の申立人の強制配転は、明らかに組合つぶし、組合活動の阻害を目的として行われたものです。

前田証人は、「組合活動につきましては、私どもより教育委員会の方がよく知っている」（第二〇回前田証言P八）と証言しており、

私の組合活動についてはヒアリングで話をするまでもなく、市教委がすでに熟知していたことが証言されています。市教委は、市芦高校の組合の状況を熟知した上で、組合つぶしのために本件配転を含む併合事案の配転を行ったものです。

第9 私教育活動と組合活動と 嫌忌した市芦高校からの排除

以上述べてきたとおり、私の教育観・教育実践は、市教委のめざした受験・管理教育とは真っ向から対立していました。私は、これまでの市芦高校の教育の正しさを確信していましたし、十数年かけてきた教育実践を大切に守りたいとも考えました。だから、私は、「教育改革」の誤りを指摘し、批判してきました。

また、学校運営のあり方にも問題を感じていましたので、教員が全員集まる唯一の機会である、たった五分間の朝会で、職員会議を開催して教育のあり方について職員全体で協議することや、学校運営についても職員全員が意見を言える機会を設けることを要求し続けました。

私が、職員集団の中で「教育改革」批判を続けている中で、前述の通り、生徒の中にもこれまでの市芦高校の教育を支持し、「教育改革」を批判する動きが起ってきました。

私は、生徒たちの批判や要求は正しいと受けとめました。しかし、教員としてそのことを同僚に訴えたり、協議する場がなかったため、私は、組合ニュース等によって生徒の気持ちや要求を全教員に知らせる一方で、「教育改革」批判を組合として展開するため、組合委員長として先頭に立ちました。

また、私は、これまでもたびたび奨学金申請を不採用にした市教委や校長に対しての抗議活動をおこない、生徒の進路保障に非協力的であった市教委に対しての要請・抗議活動を行ってきました。

例えば、『時を刻む』（甲第224号証）P二七・二九及びP三一・三五に記載されている奨学金制度に関わる取り組み、同P六六・七五に記載されている進路保障の取り組みなど、一九七二年度以降の取り組みには全て積極的に参加してきました。その中で、芦屋市や他市の教育委員会と激しい論争を展開することもありました。特に、一九八五年の二二回生進路保障の取り組みでは、生徒の就職状況が厳しい中で、市芦高校からの協力要請に応えない市教委に対して、鈴木と私の二人で、吉谷指導部長を他の職員の前で批判し抗議したことは、私が市教委から嫌忌されるに十分な材料でした。

さらに、組合活動においても、組合執行委員を歴任し、組合活動に積極的に関わり、一

九八〇年の強制配転反対闘争では組合執行委員として闘いを担い、一九八六年度には組合活動の規制や停職処分・強制配転処分に対する反対運動に組合書記長として、一九八七年度の強制配転反対闘争や定員内不合格反対運動にも組合委員長として組合のまとめ役として先頭に立ってきました。一九八八年度に私が強制配転を受けたときも、組合委員長として「教育改革」反対運動の先頭に立っていました。

以上、簡単に述べたとおり、教育活動においても、組合活動においても、「教育改革」「組合潰し」を推進しようとする松本教育長体制下の市教委にとって、私は嫌悪してあまりある存在であったにちがひありません。停職処分と校務分掌は、私の組合活動と教育活動を嫌った市教委と校長の対応の典型でした。しかし、この停職処分による恫喝や分掌は、生徒と共により「教育改革」批判を続ける私は、一刻も早く市芦高校から排除する対象であったのです。

私の強制配転は、一九八六年一〇月の配転をはじめとする一連の組合弾圧、教育弾圧を目的とした強制配転の一環であり、人事権、裁量権を濫用したものであって、即刻取り消されるべきものです。

さらに、私たちは不当に長く学校から隔離されています。そのことによって、私は生徒との接触を長年にわたって断ち切られています。学校において生徒と接することで力量を高めていくしかない教員にとって、長年学校を離れて事務に従事し続けることは、教員としての感性を磨耗させ、教育力を低下させずにはおきません。私は、そのことを痛感しています。

また、政治的意図による私たちの配転により、市芦高校の現場の教育力が低下し、卒業



生を大幅に減少させ、生徒に大きな不利益を及ぼしています。この点からも、形式だけで内実の伴わない、政治的宣伝としての「教育改革」を掲げて行われた一連の強制配転は、非教育的目的で行われたものと判断せざるを得ません。その非教育的目的で行われた一連の強制配転の一環として行われた私の違法・不当な配転を、公平委員会が、公平かつ厳正な審理により取り消され、学校現場への即時復帰を決定する裁決を出されることを求めます。

活動日誌△抜粋△1996.1.5～1.24

- 1・5 事務局会議。兵高教新春の集い。
- 10 法対会議。
- 12 事務局会議。
- 16 事務局会議。
- 17 事務局会議。芦屋地労協常幹。芦屋被災市民グループによる一・一七アピール駅ビラ情宣。
- 19 神戸地裁第五回公判（原告第四準備書面（一九八七年強配事案共通部分）提出）
- 20 解放同盟芦屋支部旗開き。
- 24 救援会幹事会（公平審に向けての取組等）事務局会議。
- 26 事務局会議。

会計報告について

救援会事務局

九年余にわたる長期間、会員の皆様方をはじめ、ご支援をいただいております皆様方に対し、厚く御礼申し上げます。

別紙のとおり会計報告をいたします。

昨年一月の阪神大震災により、通信発行も半年近く途だえることを余儀なくされました。その間、地裁への提訴、公平審の再開と、多くの準備に追われる中で、会計報告が一年も遅れてしまいました。会員、支援の皆様方には深くおわびを申し上げます。

公平審も大詰めですが、公判の維持や署名活動等で今後とも皆様方のご支援をよろしくお願い申し上げます。

△後記△先日、小川分会長が管理部長に呼び出され、「大角をなんとかしろ、と小林助役が言ってる」と言われた。大角先生に聞いたところ、通勤電車で偶然出会い、小林が座った前に黙って立っただけとのこと。それだけで部長を通じて恫喝がかけられたのです。「市芦組合員は近づくな」というのか。組合に対するいいがかりもここまでくると滑稽といえない。権力をカサに処分を乱発した小林（元管理部長）の面目躍如たるものがある。

恥を知れ！